

## 解説

### 柳谷 あゆみ



© Marco Giugliarelli  
for the Civitella  
Ranieri Foundation,  
2017

オダイ・ズウビー (Oday al-Zoubi) は一九八一年ダマスカス生まれの作家・ジャーナリストである。英国イースト・アングリア大学で哲学の博士号を取得した彼は、バートランド・ラッセルの著作のアラビア語訳を刊行するなど翻訳家としても活躍している。実生活では、大学院博士課程在学中の二〇一一年にシリアの反体制運動「シリア革命」を擁護したことでシリアからの出国を余儀なくされ、現在はスウェーデン在住である。

ズウビーの執筆活動は多岐に渡り、ジャーナリストとしてアラビア語以外でも記事を執筆しているが、その文学作品はアラビア語で執筆されたエッセイと短編小説とに大別できる。

エッセイでは、彼がシリア文化ウェブサイト「ジウムフリーヤ」や新聞「クドウス・アルアラビー」紙などに寄稿した文をまとめた『失われたウンム・ハーシムのランプ (qindil umm hasim al-maqbul)』が二〇一六年に刊行されている。また、短編作家としては二〇一六年刊行の短編集『沈黙 (al-samt)』を皮切りに、『窓群 (al-mawqif)』(二〇一七年)、『智慧と無邪気の手紙 (kitab al-hikma wal-sadiqa)』(二〇一九年)の計三冊の短編集を出している。作品の一部はすでに数か国語に翻訳されており、彼の「寒い北の試練 (imihan al-simal al-barid)」の英訳『The Trial of the Cold North』は、二〇一九年に『アジア短編小説傑作集 (The Best Asian Short Stories 2019)』に選出された。

今回翻訳した「挽歌 (al-mariya)」は『失われたウンム・ハーシムのランプ』に収録された一篇である。シリア知識人による「シリアの証言 (shahadat al-shi'ya)」シリーズの十九冊目として刊行された同書は「亡郷」と「革命」の二部から構成されており、「挽歌」(初出は二〇一五年八月二七日付「ジウムフリーヤ」)は前半の「亡郷」に収録されている。

本作は二〇一五年に亡くなったキリスト教徒の祖母の思い出を軸に、シリアの一家の出来事と、二〇一一年以降の激変を静かな筆致で描いた作品である。具体的には書かれていないが、

作者自身はイスラーム教徒で、母方の一族がキリスト教徒であるという背景を踏まえると、当初受け入れられなかった両親の結婚などが出来たであろう。長い年月をかけて多様な家族や隣人とで築いてきた安住の場が瓦解していく。祖国の激変によって自身の記憶と現状との接点を見失い、国に残りながら異邦人となった祖母と、祖母と祖国を失った作者の喪失感と悲しみが後に残る作品である。

本作でもう一つ興味深いのは、人びとの隔たりをさまざまな観点から切り取っていることである。親しい人との断絶によって失われるもの大きさ、そして、その距離をさすがに繋いでいく通信や記憶についても触れられている。出国以降、二度と会えなかった祖母との連絡と記憶。ダマスカスへの郷愁。これらへの思いは、死んだ祖父の幻影のようにときに鮮明な姿を取って現れる。しかし、それはあくまで全体を伴わない幻影にすぎない。二〇二〇年以降の全世界的な危機に伴う生活様式の変化という全く異なる事情によってであるが、この隔たりの問題は、現在、我々もまた直面し、意識せざるを得ない状況にある。本作の、断絶と連絡の向こうに存在する喪失を、我々もまた経験するのではないか。共同体のはかなさを想起させられる作品である。